

チベット大藏經

原 田 覚

チベット大藏經の歴史と内容を概観する事を通じて、チベット大藏經の位置づけを試みてみたい。

一、前伝期のチベット訳仏典

チベットに仏教が正式導入されたのは、ティソンデツヨン Khri sron Ide brtsan 王（七四二—七九七）が二〇歳の七六一年とされ、同王は同年に発した崇仏詔勅の中典を校訂する重要な研究資料とされて来た。果してチベット大藏經は、その様な評価に耐え得るのであろうか。問題或はその程度の価値しか得られないであらうか。問題の回答は常に将来に委ねられねばならないが、同時に現在の回答を出し続けねばならない。ここでは、チベットでの回答を出し続けねばならない。ここでは、チベ

チベットに仏教が正式導入されたのは、ティソンデツヨン Khri sron Ide brtsan 王（七四二—七九七）が二〇歳の七六一年とされ、同王は同年に発した崇仏詔勅の中で、仏教を正式導入する決意を表明している。チベットと仏教の出会いは、これ以前のソンツエンガム po Sron tsan sgam po 王（五八一—六四九）の時代頃まで溯り、中国から入嫁した文成公主（一六八〇）によって中国

仏教が、ネペールから入嫁したティツウン *Khri btsun* によってネペール仏教が伝えられている。しかし仏典の学習や翻訳はティソン・デジョン王代に至って漸くその結果につき、同王代のチベット訳仏典を敦煌資料中に見出す事が出来る。バニティシク *rBa Khi gzigs* が中国仏教、バニセルナン *rBa gSal snan* (一七九七) がインドの佛教の導入に尽力し、中国からは良琇と文素らが、インドかのはシャーンタラクンタ *Sāntarakṣita* バカマラシーラ *Kamalaśīla* (一七九七) 等がチベットに招請されてくる。

当時のチベット訳仏典は訳語がまだ一定しておらず、訳文も原語をチベット語に置き換えた丈で、時に文意が通じなかったり、さらに文法的に誤った誤訳を含むものであった。仏教の学習が進み、翻訳技術が進歩するに従つて、訳語が一定し、文法の理解が正確になり、従来の翻訳仏典に対する当然の批判が生じると共に、訳語や翻訳方法の統一が求められるに至つた。それが八一四年に成立した『〔1〕卷本』*語合* (『北京版』一四四卷、五八三三番) であり、同書の翻訳規定と訳語は、それから一〇年

二年前後には同じくペルツェク、法成らが活躍している。

正式導入後のチベット仏教は、明らかに王室の保護統制下に置かれ、八一四年頃には僧官制度も確立するに至つてゐる。僧官制度の詳細は不明であるが、現在わかつてこの所では、最高機関として世尊都僧統議会 *bcom ldan ḥdas kyi rin lugs kyi ḥdun sa* があり、世尊都僧統によって運営されていた。当時は翻訳と説教の僧が居り、翻訳師の長が三藏法師 *zhu chen gyi lo tsa pa* であり、その下に翻訳師 *sgra sgyur lo tsa pa* が居り、三藏法師は自己の論著を著述するに至り、或は「戒」師 *mukhaṇ po* の称を得るに至るのである。僧官職の最高位は大徳同平章事 *ban de bkah chen po la gtogs pa* であり、当時の宰相の上位にまで位置するに至る。大徳同平章事と世尊都僧統議会の関係は必ずしも明らかではないが、「語合」の編纂は「戒」師のもとで翻訳師達が恐らく実務を担当して成立し、以後の新定語の決定は世尊都僧統議会と三藏法師の詔問を受けねばならなかつた。また説教僧の組織も全く不明であるが、大徳同平章事に

前後の後に成立したと推定される『〔翻訳名義〕大集』(『北京版』一四五卷、五八三三番)にも正確に反映しており、新「欽」定語 *skad gsar bcad* と総称される訳語体系の成立も八一四年と認められる。この新定語は、以後の仏典翻訳に決定的な影響を与える、現代の仏教研学者も『大集』を座右の辞書として常用するに至つてゐる。勿論、当時まだそれ程は翻訳されていなかつた論理学やタントラの用語には不備があり、『大集』とは異つた訳語を、よく僅かであるが、用いた翻訳仏典もある。当時そうした異訳語を用いた仏典は、新定語成立以前に翻訳されたものと、以後のものとに分かれるが、前者はラトナラクンタ *Ratna rakṣita* 等の八〇〇年代初頭に活躍した翻訳師達のものであり、後者はペルツェク *dPal rtsegs* 等の九世紀第一の四半期に活躍した翻訳師達のものである。従つてチベット訳仏典の研究に於ては、翻訳師とその活躍年代を確認しておかねばならない。八〇一四年前後には上述のラトナラクンタ等が、八一四五年前後にはイハシハ *Ye śes sde* 等、その後ルイゲンシヒ *Kluhi rgyal mtshan* 等が、八二五一四

は翻訳を残さぬ者もあり、著作は全く残されていない。

八三六(一四八?)年、ペルツェク等によつて一切經目録たる『デンカルマ 目録』(『北京版』一四五卷、五八五番)が編纂された。その内容は「勝法たる大小乘の經部と、大小陀羅尼と、百八御名号と、讚頌と、誓願と、吉祥〔偈〕と、律の藏と、經部の注釈と、中觀の論書と、禪定の文書と、唯識の論書と、論理の論典など」によつて構成され、目録本文はさらに細分されている。或は上記項目だけが当初作成され、他は以後に細分付加が為されたと疑う事も出来るが、論証すべき論拠が明確でない。同目録は七百余の仏典を記載し、前伝期に翻訳された殆どの仏典を網羅しているが、敦煌資料などによつて、さらにそれ以外にも翻訳仏典があつた事が確認され、その多くは同目録成立以降の翻訳であろう。いずれにしても七百余の仏典が、九世紀前半の最大四〇年前後の期間に集中的に翻訳されたものである事は、訳語や翻訳方法の統一が徹底し、僧官制度が確立していたが故に為し得た事業であると推定される。八四二年には破仏(?)の王として著名なランダルマ *Gian Dar ma H* (八〇

九一八四二) が殺害され、チベットは以後百五〇年間の暗黒時代を迎える。この期間にタントラ仏教が盛んとなり、チベット東北部では中国仏教とタントラ仏教の習合が起つた様であるが、詳細は今後の研究課題である。

二、後伝期のチベット訳仏典

『デンカルマ目録』末尾には「翻訳未了の論書に」と項目立てして、中觀と論理学の六(?)種の論書が記載されており、現存の大藏經によれば、それ等の論書の翻訳師は一〇世紀末から一一世紀前半に活躍した者達である。九世紀半から一一世紀に至る期間の仏教史は、前伝期と後伝期に於ける律の相承に間断を認めまいとするチベット仏教史家達によつて、律の相承を中心として一方的に記述されているが、それは逆に当時のタントラ仏教の隆盛を示し、さらにチベット東部、東北部、西部に仏教活動の中心があつた事を示している。前記の論書の翻訳も特に西部を中心にして為され、この前後から後伝期の翻訳活動も急激に発展した。前伝期の特質は顯教仏典の翻訳が中心であるのに対して、後伝期の特質は残余の

顯教仏典の翻訳は当然として、特に膨大なタントラ仏典の翻訳にある。著名なブトン Bu ston (一一九〇—一二六四) の分類によれば、タントラは作、行、瑜伽、大瑜伽(無上瑜伽)の四種に分類される。伝承によれば、前伝期には瑜伽タントラまでしか翻訳されなかつたが、敦煌資料などによると、大瑜伽タントラの一部まで既に翻訳されている。後伝期には『時輪タントラ』の注釈に至る、現存する最大のタントラ仏典の叢書が、チベット訳仏典として蒐集されるに至るのである。

前伝期に翻訳されたと称されるタントラ仏典は、後代一五世紀にラトナリンパ Rattna glin pa(一四五〇—一七八)によって『ニンマ派タントラ全書』として纏められ、古訳タントラ gsan shags sia hyuir と称された。一方、後伝期に翻訳されたタントラ仏典は新〔訳〕タントラ gsan shags gsar ma と称され、大翻訳師リンチョンサニア Rin chen bzan po (九五八—一〇五五) に始まるときれる。伝承によれば、彼は一三歳で出家し、一八歳の時にカシミールに赴き、やがてにインドをドモト、各地の学僧達に教えを受け、帰國してはガリ mNāh ris 地方

を中心で多数の寺院を建立し、仏教の復興に尽くしたと伝えられる。彼の翻訳仏典は頗密に渡つており、内容的にも量的にも以後のチベット仏教の動向に大きな影響を与えた。特に密教仏典では、瑜伽と大瑜伽タントラに属する重要な仏典を多数翻訳し、從来から伝えられていたタントラ仏教を修正し、以後のチベット仏教の展開に基本的典拠を与えた。

『デンカルマ目録』の翻訳未了の論書も、相前後してこの時期に翻訳されており、『時輪タントラ』関係のタントラ仏典などを引き続いて翻訳された様である。リンチョンサンボに統じて、多くの学僧達がカシミール、印度そしてネペールへと趣き、該地で多くの学僧やタントリスト達に教えを受け、帰国するや教えを広めると共に、翻訳活動を行つた。またインド仏教が衰え、一一〇三年にビクラマシター Vikramashīla 寺が破壊されるに至る前後には、チベットに招請された、さらにはチベットに逃れて来たインンド僧達もあり、彼等の助力を得て多数の仏典翻訳が行われたのである。

著名なアティーシャ Atisa (九八一—一〇五四) は、招

請に応じて一〇四二年に西チベットに至り、死ぬまでに間にチベット各地を訪れ、講説や翻訳に努めた。リンチョンサンボも彼との共訳を残しているが、特にナクツォ Nag tsho とは多数のタントラ仏典と中觀論書を共訳してゐる。またアティーシャに教えを受けたドムトン Brom ston (一〇〇四—一六四) はカーダム派 bKah gdam pa の祖と仰がれ、同派はのちにシオンカペ Tsong kha pa (一一五七—一二一九) の改革を受けて、ゲルク派 dGe lugs pa に吸収される。またサキヤ派 Sa skya pa のサペン Sa pan (一一八一—一二五一) は、チベットを訪れたシャーキヤシリーバドラー Śākyasribhadra (一一七一—一二一九) は師事し、サキヤ派を改革し、マルペ Mar pa (一一一—一二一〇九七) はインド、ネペールに趣リスト達に教えを受け、帰國するや教えを広めると共に、翻訳活動を行つた。またインド仏教が衰え、一一〇三年にビクラマシター Vikramashīla 寺が破壊されるに至つた。ドムトン等にも翻訳仏典が残されてゐるが、彼等の業績の中心は、各宗派の確立に求められたのである。

アティーシャに願つて、バブヤ Bhavya の中觀論書

を共訳し、サンペ gSañ phu のネウムク Néhu thog寺を建立した。また彼の甥ロゲンシヒラブ Blo ldan śes rab (一〇五九—一〇九) はカシミールに趣き、論理学や唯識、中觀に關する重要な翻訳を残している。彼は論理学を習得すると共に、特に弥勒の五法に精通したとされる。前伝期に最重視されたバブヤの經部中觀に対し、後伝期には瑜伽行中觀が重視されるに至り、中觀自立派に屬するこの二學派の序列が逆転しており、その經緯が從来は明らかにされていなかった。大きな可能性としては、經部中觀と瑜伽行中觀の二大學派の學系を保持していたサンプのネウトク寺に於て、この転換が為され、特にロデンシヨラブの影響が多大であったと疑い得る。彼自身の著作が伝存せぬ現状に於ては、狀況証拠だけで具体的論証にまで及ばないが、彼の歴史的位置はこの疑いを充分に保証している。また自立派の二學系がネウトク寺に傳承され、ツォンカパに発するゲルク派に受け継がれている事は、ツォンカパがバブヤの外境論に近似した思想を保持し、ゲルク派が自立派の二學系の思想を傳持している事によつて確認される。

III. チベット大藏經の歴史

七世紀後半以来、一六世紀に至るまで多数の仏典がチベット訳されて來た。九世紀後半から十世紀中の、いわゆる仏教暗黒時代に於てすら、その内容と質を問わぬ限り、幾多の仏典、特にタントラ仏典がチベット訳されて來たと推定される。前伝期中に於て、既に訳語が新定語として公式に決定され、一切經目録が編纂されており、チベット訳仏典の一大叢書が成立すべき基礎は充分に整つていたが、その様な叢書が纏められていくとすべき典拠は明確でない。ただ敦煌資料を通覧すると、その用紙と書式が共通する一部の資料に注意を引かれるが、それ等も写經の一形式以上ものであると確認すべき論拠が何もない。従つて大藏經と称し得る叢書が具体的に成立したと確認するには後伝期を待たねばならないのである。

チヨンテンリクレル bCom ldan rig ral の弟子にチム＝ジヤンペーヤン mChims ḥJam paḥi dbyaṇis が居り、両者の弟子にウペ＝ロセル dbus pa Blo gsal がいた。ジャンペーヤンは師の不興を受け、ナルタノ sNar

後伝期の翻訳師として忘れてはならない者に、パツア プ＝ニマタク [s]Pa tshab Ni ma grags (一〇五五—) がいる。伝承によれば、彼はカシミールに趣き、頭密の仏教学を習得したとされ、特に中觀帰謬派の論師チャンドラキールティ Candrakīrti の論著を翻訳した事で知られている。周知の如く中觀帰謬派の思想は、ツォンカパによつて顯教學の最高思想に位置づけられ、以後のゲルク派、さらにチベット仏教顯教學一般に於て、最も重要な位置を占めるに至るのである。上記の翻訳師達を始めとして、パトン、ゴンシヒンペル hGos gZhon nupdal (一三九一—一四八一)、ターラナータ Tāraṇātha (一五七五—)などの著名な學僧を含む多くの者達によりて、翻訳活動が続けられたのである。しかし前伝期の翻訳と比較すると、決して秀れたものではなかつた。それは、前伝期の翻訳が吐蕃王国の全面的な支援に基づいて行われたのに対して、後伝期の翻訳が幾多の地方勢力や、個人的効率に基づいて行われ、特にタントラ仏典などが充分に理解されないまま、機械的にチベット語に置き換えられるなどした為である。

thāñ寺を追われ、サキヤ Sa skyā 寺に移り、機縁あつて元朝の仁宗 (一三一九—一四〇在位) に招請され、そのラマとして遇される事となつた。彼は使者に託して師に贈物をし、その不興を解こうと努め、さらにロセルにも大量の資材を送り、ナルタン寺に大藏經を編む事を求めた。ロセル等は諸寺に藏されていた多数の仏典から、より信頼出来る原本を得、それを底本とした筆写本によつて、いわゆる「旧ナルタン大藏經」を編纂したのである。大藏經は同寺の文殊堂に藏され、その後は多くの大藏經が各地に藏されるようになつた。

シャル Zha lu 寺のパトンは著名な『仏教史』を著わし (一三一一)，その巻末に詳細な一切經目録を記載し、彼の仏典分類の基本を公にした。さらにナルタン寺から大藏經の論書部を導入し、その重複を除き、不足を補う事によつて、より整つた論書部を編纂し直し、その『目録』を作成した (一三一五)。パトンの『目録』は以後に成立した大藏經の論書部の構成に決定的な影響を与え、後代の版本の大藏經論書部の構成は殆どこれに従つておらず、シャル寺の論書部は大藏經の原本として重用される

のである。

ナルタン寺の仏説部はツヨルペ=ゲワイロト Tshal pa dGe bali blo gros などトシハル=グンターン Tshal Gui than 寺に導入され、その善住式にはプトンも出席し、依頼された仏説部の改訂への協力にも応じた様であるが、詳細は明らかでない。この仏説部がツヨルパカンギヨル Tshal pa bkah hygyur と称され、ナルタン寺のものと共に、以後の大蔵經仏説部の原本として重用されるに至る。仏説部の目録や構成の内容は、宗派の意向を反映するなど、論書部の場合程に統一されていないが、ツヨルパカンギヨルを基礎にしたものが多い。以上に閲

説した大蔵經は、いざれも写本大蔵經であるとされ、写經の功德、廻向などの信仰に支えられて、版本の大蔵經を充分に利用し得る近代に至るまで、幾度も書写が重ねられて来ている。その一部がトク Tog 宮殿の写本や、東洋文庫蔵の写本の仏説部であり、近年これ等の写本に関する研究も公にされ始めている。

版本の大蔵經は、中国に於て最初に作成された。明の永樂帝(一四〇二—一四在位)の命により、ツヨルパカン

ギュルを底本として、一四一〇年に永樂版が開版された。万曆帝(一五七二—一六二〇在位)は永樂版の覆刻版である万曆版を一六〇五年に出し、万曆版続蔵を一六〇六年に出している。また清の康熙帝(一六六一—一七二二在位)は康熙版を一六八四—一九二年に開版し、同版は一七〇〇年と一七一七—一〇年、雍正帝(一七二二—一五五年在位)の一七三七年に覆刻されている。以上は仏説部の開版事情であり、論書部は雍正帝によって一七二四年に開版されている。これ等の中国で開版された大蔵經は北京版と総称され、近年出版された複製本が広く研究に利用されている。

一方チベットに於ける最初の版本は、同じくツヨルパカンギユルを底本としたジャン hJain 版である。麗江 hJain sa tham 王の木增 Mu'zen(一五八七—一六四六)とガルワン=チヨヒキワンチョク Gar dban Chos kyi dban phyug(一五八四—一六三〇)の協力によって、一六〇八—一一(一九八?)年に開版されたのがジャン版であるが、同版の版本が後にリタン Li than に移されたあるが、同版の版本が後にリタン Li than に移された為、リタン版と言う呼称でも呼ばれた。同版も仏説部の

みのものであった。

「デルゲ sDe dge H」のチハンペツヒリハ bsTan pa tshe rin(一六七八)は一七二九—一三三年に仏説部、一七三七—一四四年に論書部を開版し、これがデルゲ版と一般に呼ばれる大蔵經であり、仏説部はリタン版を底本としている。同じリタン版を底本として、チヨネ Co ne 版の大蔵經の仏説部が一七三三—一四三年に、論書部が一七五三—一七三年に開版されたが、論書部はデルゲ版論書部の覆刻であった。

一方ダライラマ七世(一七〇八—一五七)の命によりポラネ=ソナムトプダギー Pho lha nas bSod nams stobs rgyas(一六八九—一七四八)がナルタン版を開版した。仏説部は一七三〇—一三一年、論書部は一七四一—一四二年に開版され、底本としてはダライラマ五世(一六一七—一八二)の作成した写本大蔵經が重視されたようであるが、仏説部はツヨルパカンギユル、論書部はシャル寺の系統を受けている。最も新しくはダライラマ一三世(一八七六—一九三三)によつて、一九二三年にラサ lHa sa 版が開版されているが、これは仏説部のみのものである。同

じく仏説部のみの版本として、一九〇八—一〇年にウルガ Urga 版が開版されており、ほかにクンブム sKu libun 版や、チャムド Cha mdo 版も開版されているが、後二者の詳細は不明である。その他ブータンのブナカ Punaka 版があり、論書部も備えている様であるが、同じく詳細は不明である。

上述の如く大蔵經の編纂は一四世紀に至つて漸く現実のものとなつたが、元朝に趣いたジャンペーヤンは中国に於ける大蔵經の盛行に刺激される所が大であつたろうし、また彼を介した元朝からの資材援助があつて初めて、この様な大事業が実行されるに至つたのである。中國では既に宋代、一〇世紀以来、大蔵經の開版が盛んになつていたが、開版には編纂に劣らぬ程の資力が必要であり、ダライラマ政権の発願になるナルタン版の開版についても、ボラネの尽力に預るなど、多くの困難を経ての完成であった。

四、チベット大蔵經の内容

大蔵經は三蔵とも称され、經律論の三部から成る。チ

ベット大藏經は、仏説部と論書部の二部に大別される。

仏説部はカンギュルの訳であるが、カンギュルの本来の意味は「チベットに転変した仏説」であり、論書部は「シギュル bstan 'gyur の訳であり、「チベットに転変した論書」が本来の意味である。これが各々「チベットに翻訳された仏説」「チベットに翻訳された論書」の意味に常用されて、現在に至っている。仏説部には三藏の經律の二部が含まれ、膨大なタントラも当然の中に含まれておらず、文字通り仏の所説を集めたものとして、歴史上の存在としての著者名は記されていない。論書部は三藏の論と対応し、仏説部に対する注釈書類、仏教哲学各派の論書、その他の五明處に関する論書が集められており、歴史上の存在としての著者を持っている。

仏説部の仏典の配列は、既に開説した如く、各大藏經によって多少ずつ異っているが、顯教經典、タントラ、律に三大別され、顯教經典は小乘經典と大乘經典に分かれ、タントラは作、行、瑜伽、大瑜伽に分かれ、大瑜伽はさらに方便（父）、般若（母）、無二の三種に区分される。律は小乘佛教に属する仏典であるが、チベットでは翻訳された仏典部はカソスクリット語から翻訳されたものであり、少數の漢文から翻訳された仏典の外、蒙古語やブルシャ語から翻訳されたとする仏典も含まれている。各々の仏典に付された奥書や、各々の目録部に記述された内容から、その仏典の著者や、翻訳師、その仏典が受けた改訂の事情などが、個々に明らかにされつつある。目録部の構成は各大藏經によつて異なるが、収載されている仏典の目録は当然として、その大藏經が完成されるに至る縁起、さらに仏教史一般などが記述されており、大藏經成立史の研究は勿論、チベット仏教史の研究などにも利用されている。プトンの『仏教史』も、インドとチベットの仏教史の記述は、次に記述される一切経目録の解題の役割を果しており、プトン以降に成立する大藏經目録部と仏教史書類の構成は類似したものとなつてゐる。勿論、前者は大藏經の縁起や目録そのものが主要部分となり、後者は仏教史の記述が主要部分となつてゐるのは自明の事である。

各大藏經の成立事情も、目録部、仏教史書類、学僧達の伝記や聽聞録などの研究によつて、次第に明らかにな

現代に至るまで小乘戒が伝持されており、詳細に研究されている。一般に利用される北京版の構成を見ると、第一にタントラ、第二に般若經類、宝積經、華嚴經、その他の諸經が收められており、諸經の中には小乘經典も含まれているが、その数量は少ない。第三に律が收められて、最後に仏説部の目録部が付されて終つてゐる。

論書部の仏典の配列は、既に開説した如く、プトンの『目録』に従つており、各大藏經によつて多少の加脱はあるものの一定している。同じく北京版によつてその構成を概観すると、第一に讀頌類、第二にタントラ注釈書類が收められ、第三に諸經の注釈書類が收められている。この第三の部分には、般若經の注釈書類、中觀論書、諸經の注釈書類、唯識論書、阿毘達磨論書、そして律の注釈書類が順次に收められ、次いで本生、書翰、論理學の論書が收められ、五明處の残りである声明、医方明、工巧明に統いて修身の論書、そしてその他の雜部が付加されているが、雜部の中には前伝期のチベット撰述仏典も含まれている。最後に論書部の目録部を加えて、論書部が終り、大藏經が完成してゐる。

りつつあり、特に各大藏經の相互関係や、版本大藏經の覆刻、改訂の事情なども明らかにされつつある。また各大藏經の目録も整備され、相互の対照表も公刊されるに至つてゐる。さらに各大藏經そのものの利用も、近年の複製出版やマイクロフィッシュ化によつて、大幅に前進している。利用が進んでいるのは、特に版本大藏經であり、写本大藏經、さらに単行の写本や版本の仏典の利用は、まだまだ限られた範囲に止まつてゐる。従つて大藏經内の個々の仏典の研究も、入手し得る幾種かの資料を対照し、異同を明らかにする程度である。

大藏經に含まれる仏典の数は、各大藏經によつて相異しているが、仏説部は千百部前後であり、その内タントラが三分の二程度を占めている。論書部は三千五百部余であり、その内タントラ関係の仏典が六分の五前後を占めている。チベット大藏經に於けるタントラ仏典の重要性が分かると共に、チベット仏教に於けるタントラ仏教の重要なも、同時に推定する事が出来るである。大藏經の中には特殊なものとして、インド哲学学派の論書や、サンスクリット文典、或はインド文学などの翻訳も

含まれており、それ等は決して多数ではないものの、チベット人がインド文化の導入に積極的であった点を見せつけられる。

五、チベット大藏經の位置と諸問題

上述して来た如く、仏典の學習やチベット訳は、八世紀後半に開始され、九世紀前半中に顯教仏典の主要部分が翻訳され、一世紀初頭以降、膨大なタントラ仏典を中心、一六世紀頃まで翻訳活動が繼續した。仏典の漢訳が宋代、ほぼ一〇一一世紀に終了した点を考慮すると、チベット大藏經の重要な特色が明らかである。即ち、九世紀以前に成立した漢訳仏典は、チベット訳仏典と比較して、より古いサンスクリット仏典の内容を伝えているのである。また一〇世紀前後以降に發展したタントラ仏典は、漢訳タントラ仏典に比較して、より広範囲、より大量にチベット大藏經に伝存しているのである。現存のサンスクリット仏典、特にタントラ仏典の多くが近代の写本である事を考慮すると、チベット訳タントラ仏典はより古いサンスクリット仏典の内容を伝えて

いる事となる。従つて漢訳、チベット訳、さらにサンスクリット語の仏典を比較対照する事によって、或る仏典の発達史を明らかにする事が出来、特に經典やタントラの研究には重要な視点を与えてくれる。その為には当然、各資料の成立事情が厳密に考証され、各資料の文面を相互に会通するのではなく、各資料の各自の説解が独立して為された上で比較対照が行わるのでなくてはならないであろう。

チベット訳仏典は新定語によつて統一され、新定語は以後の翻訳に決定的な影響を与えた。ここで重要な点は、新定語の制定に至る翻訳規定が、あくまでもチベット語として分かり易く翻訳せよと規定している点にある。即ちチベット訳仏典は、従来一般に言われて来た様なサンスクリット仏典を機械的にチベット語に置き換えたものではなく、あくまでもチベット語として通じる文面として翻訳されたものなのである。漢訳仏典と比較すると、訳語が統一され、サンスクリット仏典に出来る限り忠実に従つて直訳されたチベット訳は、確かにサンスクリット原典に近い文面を保存している。しかしそれ

は、チベット訳をサンスクリット文法に合わせて読解する事を許すものではない。勿論そうせねばチベット語として理解しかねる資料がないわけではないが、それは翻訳師の未熟さを示す文で、チベット訳の特質に數える事は出来ない。程度の差こそあれ、漢訳にも類似した事情がある。佛教漢文の如き仏教チベット語もあるが、それはサンスクリット語の關係代名詞や前接辞の翻訳方法など、限られた範囲のものに過ぎないのである。或るサンスクリット仏典に幾種類かのサンスクリットの注釈書が存在している如く、チベット訳仏典にも幾種類かのチベット撰述の注釈書が存在しており、それ等はチベット訳仏典の理解、解釈を異にしているのであり、サンスクリット原典の讀解を問題としているのではない。従つて、ここでも我々は、チベット訳仏典をチベット語として読む努力を、要求されている事となる。

大藏經仏説部は旧ナルタン大藏經、ツエルパカンギニルの系統を引き、論書部はシャル寺の系統を引き、その起源は結局一に帰してしまう。大藏經が書写され、開版され、覆刻される時には、校訂や改訂の手が加えられる

事もあったであろうし、その場合サンスクリット原典、幾種かのチベット訳仏典との対照、さらに誤写されたとするべき字句の訂正などが行われる事もあった。事実、現存の大藏經の各仏典の対照研究によつて、その異同が明らかにされたものもあるが、起源が同一である以上その異同も限られた範囲のものでしかない。しかし特に前伝期の翻訳は、佛教暗黒時代を経る事によつて、落丁や乱丁した資料が後伝期に伝えられ、それがそのまま大藏經に収められている実例も発見されている。その端緒となつたのは敦煌資料との対照研究であり、敦煌資料には現代に未伝の仏典、異訳の仏典、また上述の如き同一仏典でありながら対照研究を必要とする仏典が多数含まれている。例えば現代に未伝の漢文チベット訳禪宗文献、新定語制定以前八世紀後半の古い翻訳仏典、現存大藏經ではサンスクリット語をチベット文字に転写した丈の陀羅尼を翻訳してある仏典、また上述の落丁や乱丁を訂正し得る仏典などである。後伝期の翻訳を含めて見ても、校訂や改訂が加えられる前後の両資料を比較する事によつて、チベット訳仏典の発達史の一端を明らかにし得る

であらうし、起源を異にする資料を利用し得るならば、その研究は一層の進歩を示すであらう。チベット訳仏典の内研究は、特に利用する資料の成立事情についての厳密な考証を伴わなければならない所以である。

チベット大藏經はチベット仏教を支える重要な条件であり、チベット仏教はチベットの文化の中心的存在である。仏教はチベットに伝來し、定着し、發展して来た。伝来以来、チベットの仏教は時の政權と密接な関係があり、ダライラマは政教両権を手にした。チベットの文化を担つて来たのは、多数の秀れた学僧達であり、彼等は広い意味での仏教学、五明處を學習する事により、一切智者となる理想を追つた。彼等の學習対象は究極的には大藏經に収められた仏典であり、それ等の仏典に対する理解を深め、理想を實現せんとした。彼等の著わした諸注釈書類は、彼等の理解を明示している。いわゆるチベット撰述仏典と総称される膨大な文献群の大部分は、大藏經中の各仏典に対する注釈書類であり、それはチベット仏教を形作り、チベットの文化を特徴づけている。チベット大藏經の研究は、インド仏教さらに仏教一般を研

究する重要な資料である事は言うを待たないが、一方ではチベット仏教さらにチベットの文化を研究する重要な資料である。同じ資料を利用しながら、その研究目的に応じて、研究の方法論が異つて来るのは当然である。印度仏教を研究するに当つては、チベット訳の陰にあるサンスクリット原典の姿を追求し、チベット仏教を研究するに当つては、チベット訳を原典として、如何なる理解、如何なる思想が展開したかを明らかにせねばならない。この両面は矛盾するものではなく、相互に補い合うものであり、両面が整つて初めてチベット訳仏典の位置と価値が決定される事になるであらう。

【補注】チベット大藏經の歴史と内容を概観し、多少の問題提起を行つた。チベット大藏經の研究は近年急速に發展して來ており、それ等の最新の研究成果を批判的に取扱して概説するよりも、大藏經に関する基礎的情報を記述し、その取扱いの課題を氣の付いた範囲で略述した。各項目に關連する研究論文等を以下に掲げて、本文の欠を多少とも補いたい。
I、前伝期のチベット訳仏典、チベット仏教史については、山口瑞鳳「チベット仏教」、(講座)東洋思想』第五卷、東京大学出版会、一九六七年、同『吐蕃王國仏教史年代考』、『成田山仏教研究所紀要』(『成田紀要』)第三号、一九七八年

【参考文献】
 I、「後世顯のチベット語仏典 パーナミーによつた D.S. Rutherford, *The Life of Bu ston rin po che*, SOR, XXIV, Roma, 1966 など参照。『時輪タントラ』は羽田野伯猷「時輪タントラの成立に関する基本的課題」、『密教文化』八二、一九四九年など参照。『リハマ派タントラ全書』は K.W. Eastman 「チベット訳 *Guhya-samajatantra* の敦煌写本」、『西藏学研究』(『西藏報』)第一六号、一九八〇年など、リハマ派タントラ全書は稻葉正就「チベット中世初期における般若中觀論書」上、「*法華經疏*」第一、第二、一九六六・六七年、川越英眞「*Rin chen bzam po* 訳註」、『印度學研究』

Academy of Indian Culture, SPS 246, New Delhi, 1980

などがあつて、日本大藏經に關する論議光緒「(京口慧海師
將來東洋文庫所藏) 日本チベット大藏經調查備考」『大正大
學研究紀要』第K川轉、一九七七年、Helmut Eimer, Zur
Beurteilung der Textqualität der Kanjur-Handschrift
aus dem Palast in Tog/Ladakh, *Indological and Bud-*

dhist Studies, Volume in Honour of Prof. J. W. de Jong,

Canberra, 1982 などがあつて、その他の学際的論議研究が多數あ
る。トーレス『仏教史』と『西藏』との对照は、羽田野伯猷

「チベット大藏經總起」、「鈴木崇智財團年報」III、一九六
六年、西岡祖秀「トーレス仏教史」田嶽部素司、一・二、
『(東京大学文学部) 文化交流研究施設研究紀要』四・五、一

九八〇・八一年なん参考。

四、チベット大藏經の内容 内容としては、同じく御牧
「チベット語仏典について」と略述され、前節に掲げた関連
する諸研究をも参照された。

五、チベット大藏經の位置と諸問題 筆者とは異った見解
が、長尾雅人「山口先生のチベット学」、『西藏報』第一回
号、一九七八年に示された。

(註記: 40-1980・東洋外語叢書)